元気・勇気・挑戦！
がんばろうサイコー！

株式会社 サイコー
代表取締役　齋藤 孝三

これまでの経験をはるかに超える激しく長い揺れの地震は、想定を超える巨大津波を引き起こし、弊社仙台港資源化センターも５メートルを超える浸水により壊滅的被害を受けました。幸い、社員は冷静な判断により避難し、おかげさまで人的被害がなかったことがなによりの救いと感じております。

震災直後の被災現場を見て復興の道のりの険しさを感じましたが、お取引先の皆様におかけするご迷惑を最小限に食い止めるべく、仙台港資源化センターを一日も早く復興させ再構築することが私の務めであると認識し、早期復旧を指示してセンターの修繕工事に着手しました。仙台港資源化センターに勤務する社員を中心に、過酷な環境の中、センター内のがれき・汚泥の撤去作業や、自家発電を使用しての建物・機械設備などの洗浄作業、ポンプでの汚泥水の汲み上げ作業など、本格的復旧作業に向けての地固め作業を実施してくれました。復旧作業を懸命に行ってくれた社員の姿を目の当たりにし、社員は宝であることを再認識いたしました。

５月初め、一部修繕工事が完了し営業を再開できました。その時点では、機械設備の復旧は部品の調達が困難で完全復旧とまではいきませんでしたが、今般は建物・機械設備その他ライフラインも完全に復旧いたし、従来通りの業務を遂行できるようになりましたので謹んでご報告を申し上げます。

今回の震災では多くの皆様から過分なご厚情とご支援をいただき、弊社は周囲の皆様の温かいご支援により支えていただいていることを改めて感じさせられました。これからは微力ながら日々の活動をとおして恩返しさせていただきたいと考えております。

併せて、人との出会いを大切にして社会に信頼される企業を目指すという弊社の経営方針のもと、これまで以上に地域社会への貢献を意識しながら、お取引先の皆様に喜んでいただけるよう一層きめの細かい業務活動を推進してまいる覚悟でございます。

東日本大震災からの復興を契機に、地域社会を温かい気持ちで支え合う日本人の良さを発揮しながら、これまで以上の活力ある地域社会が一日も早く再興することを念じ、お礼方々ご報告を申し上げます。

待ちに待った復旧

仙台港資源化センターは8月から全ての業務について通常操業となる。全国の同業者様やお客様、工事業者様など様々な方面からの支援を得て、当初の予想より奇跡的なスピードで復旧作業が進み、ここまでこぎつけることができた。

復旧した仙台港センター

機密書類の破砕施設

事務所建屋

事務所内

さらなる東北の復興に向けて

震災を教訓に、私達社員の結束力は一段と高まった。この困難をみんなで乗り越えられたことは誇りであり、かけがえのない財産となった。震災復興スローガン「元気・勇気・挑戦！がんばろうサイコー！」を掲げ、自分たちの復興の姿が、お客様や地域にも勇気を与えられるよう、社員一丸となって頑張っていきたい。

地球にやさしい
サイコー

お問合せは TEL. 022-255-3150（サイコー）
詳しくは
http://www.kk-saikoh.co.jp/ サイコー 検索

事業本部	〒983-0821　仙台市宮城野区岩切字分台 52 TEL. 022-255-3150　FAX. 022-255-9955
仙台中央資源化センター	〒983-0821　仙台市宮城野区岩切字稲荷 160 TEL. 022-255-8676　FAX. 022-255-8697
仙台港資源化センター	〒983-0002　仙台市宮城野区蒲生二丁目 2-1 TEL. 022-387-1215　FAX. 022-387-1225

被災状況・復旧の経過

東日本大震災発生

平成23年3月11日（金）14時46分の地震発生時、弊社事業本部および仙台中央資源化センターが位置する仙台市宮城野区岩切では、これまでに経験したことのない強く長い揺れを感じた。道路はところどころ液状化しマンホールが飛び出し、尋常でない事態だと感じた。

その頃、仙台港付近にある仙台港資源化センターでも、建物の倒壊は無かったものの周辺すべてが停電し、すぐに大津波警報が発令されたため、センター勤務の社員は全員でトラックの荷台に乗り合わせ、海から離れるように避難。やがてすぐに渋滞に巻き込まれたためトラックを乗り捨て、徒歩で岩切の事業本部までたどり着いた。

夜になり、渋滞に巻き込まれながらも回収業務から帰って来た社員の安否を確認しながら明日からの対応を話し合った。自宅が津波の被害にあった社員4名は会社に泊まることにした。

当日は雪がちらつくような寒さだったが、幸い事業本部にはパレットが数枚あり、それを割って薪としてドラム缶の中で燃やし暖を取った。電波のつながる携帯電話を貸し合い、それぞれの家族や親せきの安否を確認しあいながら夜を明かした。

(3.11)散乱したパソコン類

(3.11)玄関の花瓶も割れた

(3.12朝)事業本部

曲がった事業本部の電柱

仙台港資源化センターの被災状況を確認

翌日、事業本部内に「災害対策本部」を設置した。安否確認、燃料調達、食料調達、顧客対応、処分場確認などの班に分かれそれぞれ情報収集しながら対応にあたることにした。

社員の安否確認は携帯電話だけが頼りであったが、13日までに社員全員の無事が確認できた。社員の中には回収先で津波に遭ったため、お客様の建物内に避難させていただき、数日後やっとの思いで帰社した者もいた。

同日、社長含む役員が仙台港資源化センターへ被災状況の確認に赴き、改めて津波被害の甚大さを確認した。津波の高さは5メートル以上。ほとんどの設備が浸水し、隣接地からがれきや車が壁を破って流れ込み、壊滅的な状態であった。

千年に一度の大地震とはいえ、今後の余震やその津波のことを考えると同じ場所で復旧するのは得策でないという意見もあったが、できる限りお客様にご迷惑をかけない方法は何かと考え、社長判断で一日も早く仙台港資源化センターを復旧することを決断した。

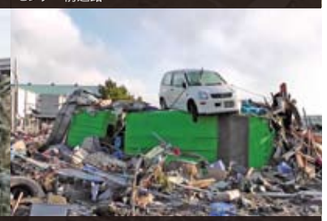
(3.12)災害対策ミーティング

センター脇道路

センター前道路

機密書類処理施設

駐車場から流出したトラック


駐車場から流出したトラック

今できることは何か

仙台港資源化センターは津波によって甚大な被害を受け、トラックも5台流出、さらに燃料調達の見通しも全く立たない。

しかし、燃料さえあれば残されたトラックで仕事はできる。そのような状況で、自分たちが今できることは何かを皆で考えた。

弊社専務が仙台青年会議所（仙台ＪＣ）の理事長を務めていることもあり、14日からは救援物資輸送のためトラックの緊急車両指定の申請や人員確保を始め、16日より気仙沼、三陸、石巻地域に向け、救援物資輸送の支援を始めた。派遣するドライバーは自宅が津波被害を受けた社員が中心だったが、とにかく自分たちが今できることをやっていくという趣旨を理解し、頑張ってくれた。

その他にも日頃から集団資源回収でお世話になっている子供会や町内会にはトイレットペーパーやオムツなどの日用品をお届けした。

(3.15夜)仙台JC支援ミーティング

(3.16)支援車輌出発

(3.18)復興スローガンを掲げる

(3.26)子供会への支援物資提供

業務再開へ向けて

電気・水道・通信などの復旧が見込めない中ではあったが、3月23日より仙台港資源化センター勤務の社員を中心にがれきの撤去や泥かきを開始した。設備メーカーの方々からもいち早く震災見舞いのご連絡をいただき、一日も早い復旧を考慮しフルメンテナンスしていただくなど、迅速な協力をいただいた。

また、仙台港資源化センター以外の社員も地域の復興を祈り、自社のトラックにはすべて「がんばろうTOHOKU・MIYAGI」の横断幕を設置して回収業務にあたった。

(3.23)事務所内の泥かき

がれき撤去作業

集められたがれきや車

横断幕を掲げた自社トラック

全国からの支援

ありがたいことに震災翌週には全国の同業者から米やその他食糧、水などの支援物資が届き始め、トラックの荷台いっぱいで届くこともあった。

また、トラック5台を津波で失った状況を全国の同業者に知らせたところ、トラックの貸与や物資の提供など様々な支援の申し出があった。その中で岐阜県の仲間が、新車のパッカー車（ゴミ収集車）を貸してくれることになった。

届いたパッカー車を見て、社員全員が驚いた。岐阜県の小学生160名から集めた応援メッセージや、「しんらいする」というひらがなでデザインされた「絆」の漢字、イラストなどが車体いっぱいに入っている。新車を貸していただけるだけでもありがたいのに、この想像を超えた心配りに社員全員が感動し、元気と勇気をもらった。

(3.24)同業者から届いた支援物資

(4.22)応援メッセージ入りパッカー車

「しんらいする」が漢字の「絆」に

震災廃棄物の回収